

# 都 鳥



第 9 号

2011年 5 月 版

題字「都鳥」は 伊藤幸子の筆

## 四日市高校への想い

--- 都鳥からのメッセージ ---

私達が四高を卒業したのが1952年3月ですから、来年でちょうど卒業60周年を迎えます。そして私は38年間の教員生活の最後を締めくくる定年退職という形で同じ四高をもう一度卒業しました。1994年の3月です。

ただ同じ四高でも実は正式な名称は違うのです。私達が卒業した四高は三重県四日市高等学校で、定年を迎えたのは三重県立四日市高等学校なのです。1956年4月に改名しているのです。三重県で1948年5月に新制高校として発足した高校はすべて三重県〇〇高等学校で県立とは名称に入っていないのです。そして一斉に1956年4月に三重県立〇〇高等学校に改名しているのです。なぜそうなったかは少し調べてみましたが分かりませんでした。「四日市高校百年史」にも年表欄に校名変更と記されているだけです。

都鳥も「昭和27年に三重県立四日市高校を卒業した仲間がつくるエッセイ集です」と紹介されています。多少気になってはいたのですが、今の母校の名前のほうが部外者に紹介するにはよくわかるでしょうし、何よりもわが母校は110余年の間途絶えることなくその伝統が受け継がれているのですから、名前云々はたいしたことではないとも思って今まで特に問題にはしなかったのですが、皆さんはお気づきでしたでしょうか？

私は生徒であった四高からは二七会のお仲間という横軸の、教師として過ごした四高からはたくさんの卒業生という縦軸の絆をいただきました。そしてその方々に支えられまた教えられ助けていただいて今日を生きています。

四高が今後もますます発展し、地域に根ざし、地域に愛され、地域に信頼される高校であってほしいと強く願っているのですが、その思いは卒業生として皆さんも同じであると思っています。巻末でお知らせしましたように「都鳥」は次号で終わりになりますが 二七会で結ばれた私達の絆が絶えるわけでは無く、四高の卒業生であることに誇りをもって心豊かに生き、できる限り健康に気をつけて長生きし、これからもずっと交流を深めていくことができたらと願っています。

(水谷ひで 記)

安藤 雍子（津田）

名古屋市長区鳴子町 5-97

### パタボン

娘の家では、パタボンと名づけた猫を飼っていて、今年15歳半になります。私が娘の家に滞在していたときのことです。パタボンが少し出血したので娘がかかりつけの獣医さんに予約の電話を入れたのです。予約は午後2時とのことでしたので、娘と私がランチをすませて家に帰ると、いつも玄関に出迎えにくるパタボンがいません。呼んでも出てこないのを探すとクローゼットの一番奥の隅っこに隠れていたのので、引っ張り出して獣医さんに連れていきました。パタボンは獣医さんに行くのが嫌いなのです。

パタの食事の場所は台所の片隅に決まっていますが、みんなの食事のときには、必ず食卓の決まった椅子に行儀よく座ってなにもねだらないで参加しています。

娘夫婦がマッサージ師にきてもらったときのことです。細長い台の上にバスタオルを敷いて、まず夫が、次に娘がマッサージをしてもらって台から下りたところ、見物していたパタボンがボンと台の上に上がったのです。三人で「パタボンの番と思ったのかしら」と大笑いしました。パタボンは驚いてタオルとともに落っこちて次の部屋に隠れてしまいました。また、節分の日に夫が庭に向かって「鬼は外」と大声を出して豆をぱっとまいたところ、ふだん庭に出たことがないパタボンが飛び出していきました。夫は慌てて「猫は内」と叫んだそうです。猫が一匹いることで家の中がとてもなごんでいるようです。

伊藤 幸子

東京都江戸川区中葛西 5- 2-7-1005

### 颯爽たる職人たち（1）

平成15年12月、虎ノ門の大倉集古館で、京都の西陣織元山口伊太郎・山口安次郎兄弟二百歳記念「千年の織物二百歳の夢」という展覧会を観た。

この兄弟はこの時兄101歳、弟99歳、合わせて二百歳という長命の西陣の織元で、伊太郎氏は源氏物語絵巻の織物に依る復元「源氏物語錦織絵巻」三巻までの発表、安次郎氏は数十点の能衣装の展示をもって、観る者の目を驚かしたのであった。

お二人とも現在は惜しくも鬼籍に入られたが、共に百歳を超える高齢に至るまで、京都西陣の織元として研究と生産に一生を捧げた素晴らしい職人さんであったから、その精魂こめた作品の展示は、それこそ目を見張るばかりの豪華さであった。

伊太郎氏は七十歳の時に、徳川家の所有する国宝「源氏物語絵巻」を一見してその美しさに打たれ、今は見るも痛ましく古びてしまったその意匠と色彩とを、「糸」に依る表現に置き換えて復元したいという願望を抱いたのだと言う。

絵巻四巻の復元はしかし、最初十年くらいと目算を立てたほど生易しいものではなく、三巻までを仕上げるのに、実に三十年の心血を注いだ実験と失敗と努力の年月を要したのであった。それだけに、紙と絵の具の場合とはまた違った質感を持つ気品に満ちた鮮やかな色合いと、人物のふくよかな初々しさには、何とも言えない奥深い懐かしさが宿っているのである。

「『源氏物語』との出逢いには、ある運命を感じます」と伊太郎氏は言う。京都の西陣という織物の家に生まれ、紫式部に縁のある「紫野」に住み、西陣の歴史、ひいては京都の歴史をさえ集大成する立場に立っているのだ。ジャカード織によって西陣織に少なからぬ影響を及ぼしたフランスのリヨンの街に関心を持ち、西陣を日本のリヨンにする事を目指して伝統的な織物の未来を展望する。コンピューターを始め、現代の新しい技術は積極的に取り入れる伊太郎氏にとって、進化は正に持続の別名なのである。

**伊藤 八重子**（野呂）

四日市市笹川 6-26-25

### 懐かしの高校時代

伊藤貴子様からお誘いをいただき、名古屋市美術館で開催されているゴッホ展（こうして私はゴッホになった）を観賞させていただきました、

その時、フッと高校時代の思い出がよみがえってきました。美術部の皆様とゴッホ展を名古屋へ観に行ったことも楽しかった思い出の1つです。

当時の私は、印象派の絵がとても好きでした。朝日を受けて輝いている絵を表現したいと、太陽の昇るまでに登校して美術部の部室でイーゼルに向かって一人黙々とデッサンをしていました。消す為のパンを受けている左手は動かさないのです。しもやけで真赤に腫れてしまいました。後にも先にも手にしもやけが出来たのは、あの時だけの経験です。寒さも忘れて夢中で木炭を走らせていたあの頃がなつかしく思い出されます。

太陽が昇って光線が変わってくると、

教室に入り皆の机の上と窓の下の腰板をせせと雑巾がけをしながら皆様の登校を待っていたのです。

当時は校門も開け放されていたのでしよう。美術部の部室も教室も鍵もなく自由に出入り出来ていた様です、先生からも誰にもとがめられず、自分も何も考えず、光の陰影の美しさを表現したいと黙々と絵を画いていた頃の純粹さを滑稽に思える今日この頃です。

人を疑う心もなく、やりたいと思うことを真直ぐに実行することが出来たあの頃の平和な時代がとても懐かしく思い出されます。

**岩脇 昌生**

西宮市殿山町 5-26

### 親子三代で楽しむテニス

正月3日、恒例のクラブ新春ファミリー大会に、今年は娘と出場、若手親子ペアに苦戦連覇ならず敗退しましたが、元気にテニスを楽しめる喜びを覚えました。

富中入学後軟式庭球部に入部、コート整備のためのローラー掛け、石灰を溶かしてライン引き、富洲原の平田紡績コートでの練習、全国無敵の上級生、福田さん・明井さん（旧姓 生川・島田）のボール拾い、3年生の夏、宇治山田での西日本大会を最後に6年間、テニスが一番、勉強は二番とテニスに熱中、思い出深いものがあります。

四高卒業後、硬式テニスに変更、7年振りにラケットを握りました。娘も孫も中学入学後テニス部に入部、上達するにつれ、威力のないボールを打つ私相手では満足できず、コーチをする機会が少なくなりましたが、純粹な孫達の笑顔に癒

され、成長に一喜一憂しながら名古屋、大阪まで、娘・孫の応援に出掛けました。

女房は中学から 10 数年軟式テニスを楽しみ、毎週土・日曜は一緒にテニス。

「今日は頑張ろう」と仲良くコートへ出掛けますが、帰宅時は「なぜ下手な攻め方をするのか」と、お互いのミスを責め合い無口、我侷なパートナーです。しかし、テニスクラブの活発で口うるさいおばさんを相手にプレーする時は際どいショットは避け、嫌われないよう心掛けております。

足腰はかなり弱くなりましたが、まだまだ元気。テニスに情熱を持って取り組み確実に繋ぎ粘りながら、好機では強烈なショットを打ち込めるよう頑張りたいものです。

**大野 ゆさ子** (西村)

知立市昭和 4-11-2

サトウ  
**奈良の頭塔**

昨年NHK 4 5 日間奈良時代一周の中で、奈良平城遷都 1300 年祭史跡頭塔の放映があったので御覧になった方も多いかと思います。10 数年前、ご近所の歴史好きの家族と一緒にレンタカーを借り、奈良の史跡巡りをしたときのこと、1 日目の行程を終えこの日の宿・厚生年金飛火野荘（現在ホテルウェルネス飛鳥路）へ着き、宿に入ろうとしたとき目の前に今まで見たこともないピラミッドのような形をした大きな建物が目に飛び込んできた。宿の玄関に入るなり受付の方に「あれは何ですか？」と異口同音に聞いた。宿の人は「あれは頭塔と言うようです。」と言って新聞記事やメモのコピーを下さった。

「頭塔」国の史跡。このピラミッド状の土塔の復元整備がこの程（平成 10 年 8 月）終わった。全国でも珍しい仏教遺跡はその建立や意図を巡る様々ななぞに包まれている。頭塔は最下段の一边が 32m

（東大寺の大仏が立った時の大きさと同じ）、高さ 10m 方形七段の土塔で奇数段の周囲には花崗岩などに浮き彫りされた天平様式の石仏がはめられている。東大寺誌によると同寺の僧・実忠が鎮護国家を願って大仏殿の南に造ったとの記録がある。東大寺の南の入り口の魔除け的なものらしいという説がある。

「頭塔」は土地の伝説によると天平 18 年 6 月 18 日、僧玄昉（げんぼう）が藤原氏との政争に敗れ、九州の太宰府に左遷されたが、かつて玄昉と対立して処刑された藤原広嗣の怨霊の祟りで翌年（746 年）死んだ。しかし、無念のあまり玄昉の髑髏が奈良まで飛んで帰り、興福寺内に落下した。それを徒弟が納め墓を築いた。これが「頭塔」と言う。肘塚、眉や目が飛んできたと言う伝説の場所もある。翌日鏡神社に行くと、また神社の神主さんにおどろおどろしい面白いお話を聞かせて頂いた。この辺りには、吉備真備、阿部晴明、藤原広嗣などの邸があったと言われている。

**片山 きぬ子** (山田)

三重郡川越町南福崎 202-3

**喜寿記念展を開催して**

昨年（平成 22 年）10 月、喜寿記念の個展を開きました。

退職後は「絵本の読み聞かせ」、「独居老人の食事作り」や「目の不自由な方のための点訳」などボランティア活動をし

ていますが、何か趣味を持ちたいと思い、六十の手習いで刺繡、水墨画、きめこみ、陶芸などの教室に通い作品を作ってきました。

文化祭やグループ展にはいろいろ出品してきましたが、十数年間作りためた作品を一堂に集めて見ていただきたく「喜寿記念・片山きぬ子展」を川越町教育センター展示ホールで開催しました。

素人の作品を見に足を運んで下さる方が居られるだろうかと心配しましたが、大勢の方々にご来場いただき大変嬉しゅうございました。

又、個展開催に当たりご協力下さいました多くの方々に感謝、感謝です。今後も作品作りに研鑽を重ねて参りたいと思っています。



**加藤 小夜子（秦）**

四日市市大矢知町 1117

### 奈良への旅

近鉄電車に乗って目につくポスターは“せんとくん”、平城遷都千三百年祭。歴史に興味を持つ私は、壮大な規模の都を振り返りたく、日帰り旅行に友達と三人で出かけました。京都のように新幹線が通るわけでもなく、24時間常に何か

が動いている大都市でもない奈良の地は本当に心の休まる場所です。

加齢とともに、長距離歩行は足から疲れてくるようになったので、奈良駅から近い興福寺拝観と奈良ホテルでの会食に絞りました。観光とは、見る、学ぶ、食べると三拍子揃って初めて満足するものですから。

国宝館の阿修羅像は、仏教擁護の神としての八部衆の一人で、図像学上では三面六臂忿怒の相を示し、いつまでも仰いでいたい気持ちでしたが、またの機会があればお参りをとの期待を抱いて、お顔を臉に浮かべながら帰路につきました。

作家堀辰雄はこの阿修羅の眼差しについて、「その一心な眼差しに自分を集中させていると、自分のうちにおのずから故しれぬ郷愁のようなものが生まれて来る」と書いていますが、確かにこの阿修羅の眼差しには、観る者の心を捉えて放さない謎めいた魅力がたたえられているように思われます。

若い時は自分中心の話でしたが、年齢とともに、お互いに知識・経験を幅広く語り合い、吸収する生活を送りたく思います。

**春日 一彦**

名古屋市西区西原町 63

### 「北」へ行って来た？

今回も大学の先輩のK氏から“テーマ”を掲げた海外旅行に誘われた。それは、21世紀に入っても同じ民族が分断されている悲劇の象徴を「板門店」近辺で実感することであった。それは、冷戦の残滓である。金大中氏の「太陽政策」が世界に明るい希望を与えたが、その後も南

北の緊張は弱まるどころ強まっている。

ソウルから板門店へ通じる幅広い直線の「自由路」の両側に建っている、数々の巨大な「広告塔」の中にはダイナマイトが封じ込まれ、北が攻めて来たら爆発させるのだという。そして道路に沿って武装した若い二人組の兵士が引切り無しにパトロールしている。

板門店に近づくと、観光バスからシャトルバスに乗り換えさせられる。そのバスには実弾を込めた銃を持って五人の兵士が乗り込み、われわれのパスポートを検分する。われわれは、軍事境界線の南北の各2キロにわたる非武装地帯の一点にある「共同警備区域」(JSA)にまで踏み込んだのだ。「北に向けて絶対に指差さないように」と厳しく注意された。

当日は「休戦会談」がなかったのでわれわれは会議室に入ることができた。もちろん、銃の引き金に指を入れた数人の兵士が不動の姿勢で立っている。しかし、数分間であるが北朝鮮代表の座席に座って記念写真を撮ることが許された。つまり、われわれはこうして北朝鮮の領土に入ったのである。

わが家に帰って「北朝鮮に行って来たよ！」と自慢げに言って驚かしたのも、まんざらのウソではなかったのである。

木村 栄子 (坂下)

寝屋川市国松町 14-1-525

### 兎に角頑張らなくちゃ

此の度は予想だにせぬ大災害に見舞われ被害に遭われた方々のお気持はお察しするに余りあります。二七会の方々は皆様ご無事でしょうか？ 自然の恐ろしさを痛感すると共に人類の驕り高ぶりに対

して、自然から大きなお叱りを受けた想いです。皆が力を合わせて一日も早く復興出来ますようにお祈りするばかりです。

私もいつの間にか齢を重ね、八十路も目の当たりとなりました。足腰が大分弱り、背中も丸くなり、歩くのも遅くなりました。電車に乗った途端に、座っておられた方がずっと席を譲って下さる。嬉しいやら情けないやら……。ああ～どうして年寄りと分るのかなあ！！ お蔭様で内臓の方は元気なので頑張らなくてはと思っています。

周りの方々に支えられて、色々な趣味に生きています。お茶、お花、音楽、コーラス、お習字、パッチワーク、体操など色々なことに頭を突っ込んで、遊びというか、勉強というか、頼りない歩みながら日々を楽しんでいます。三年程前から縁あってパッチワークを始めました。出来上がると嬉しくて友達に見せびらかして喜んでいきます。また、一年前から高齢者向けの体操に参加していますが、そこで親しくなった方がお茶の先輩で、あちらこちらとお茶の勉強に連れて行ってくださり、今まで知らなかったことを教えていただいたりして、とても幸せです。周りの方々とのご縁を大切に感謝して共に前向きに楽しく暮らすこと…。それが今の私のモットーでしょうか。





木村 達也

横浜市鶴見区東寺尾 5-5-43-203

### Castellana と Castellaneta

イタリア南部のアルペロベッロは石造りのとんがり屋根が有名で多くの人を訪れる。

この町から北へ 20 キロメートル程の所に大きな鍾乳洞がある。随分以前の事、休日にこれを見ようと滞在していた Taranto の町からレンタカーで出掛けた。10 月だったと思うけれど、将に地中海の青い空を満喫しながらのドライブであった。今の様にカーナビゲーションが無い時代で頼りは小さな地図一枚である。順調に走っていた心算がどうも変で、地図と道が合わない。一緒に行った人と考えるけれどヤッパリ間違っていそうだ。そうこうするうち T 字路に出た。丁度突き当りの所に 4,5 階建ての建物があり上の方のベランダで優しそうなおばあちゃんが此方を見ている。早速道を尋ねると左の方へ (sinistra) と教えてくれた。言われたとおり左へハンドルを切った。手持ちの地図にもそれらしい名前の町がある。しかし着いた所は違う。引き返してさっきの T 字路を反対方向に行った所目当ての町へ着いた。結局鍾乳洞を見る時間は大幅に減ってしまった。

おばあちゃんの左は私の右 (destra) であった。因みに間違えた町は Castellaneta で地図に記載されていたが、目的地は Castellana で地図から外れていた。二重の間違いによるトラブルだった。あの優しそうなおばあちゃんは恐らくもうこの世に居ないだろう。

国保 元愷

東京都世田谷区田万川-1-18-908

### 山口誓子(せいし)の思い出

昭和を代表する俳人の一人、山口誓子は昭和 16 年病を得て住友本社を辞し、白砂青松の富田浜海岸に移り住んだ。当時、私の父は四日市高校の前身である旧制富田中学の校長をしており、毎年夏には全校生徒を引き連れ、富田浜海岸で海水浴訓練をしていたが、沖合に立てる遊泳域を示す旗竿、生徒に指示事項を知らせるスピーカーなどを誓子宅とは知らずに預かって貰っていた。われわれの学年も中学 2 年までこの水練に参加した。

昭和 21 年の 8 月、父は菓子折を下げて毎年お宅を借りるお礼に参上した。間もなく中学に山口誓子の名前で校長宛の封書が届いたが、俳句に無関心な父は「ちかこ」という富田あたりの芸者のいたずらと思って開封もしなかった。これを国語の森孝太郎先生が見つかり、高名な俳人であることを父に教え開封したところ、父をモデルに「泳がざる教師も赤き禪(こん)を締め」の句が書かれていた。早速父はお詫び方々誓子宅を再訪して俳句の指導をお願いし、以後毎月のように保々村の自宅で句会が開かれることになった。

昭和 22 年夏、当時は近くの川沿いを歩くと蛍の群れが顔に当たる程沢山いたので、蛍を句題に句会が開かれ、私と 3 才上の姉も参加した。この時誓子は蛍を捕まえる私を「蛍獲て少年の指みどりなり」、姉を「脂粉なき少女とともに蛍狩」と詠んだ。

近くで見る誓子は「学問のさびしさに堪へ炭をつぐ」、「海に出て木枯帰るところなし」のような厳しさ、特攻隊への

哀切な思いとは無縁の温和な紳士であり、俳句第二芸術論を唱えた桑原武夫と激しい論争を繰り広げ、翌年結社天狼を立ち上げる気概を外に見せることは無かった。しかし一流の人物が放つ人を魅きつけ、包容する雰囲気を持っていた。

私は俳句に縁が無いが父母と姉、私の妻は俳句を熱心に作り、特に脂粉なき少女であった姉は大阪に居た昭和38年、神戸の誓子宅を訪ねて指導をお願いした。誓子が姉の訪問と保々での蛍狩りを同年7月朝日新聞の文化欄に書いた。昭和47年、保々の自宅の庭に私がモデルとなった句の碑を建てることを誓子にお願いし除幕には波津女夫と共に参加頂いた。

あれから65年、少年のみどりの指は77才の老人の指になってしまったが、あの名句と句碑は変わることなく残っている。

小島 紀子 (伍島)  
小平市鈴木町 2-865

### 春の香り

酷暑から極寒へと続いた自然の厳しさにも漸く衰えが見えた頃、公園の桜の枝がほのかに紅みを帯びて来る、通例の2月になっていました。

公園の奥にある梅林は、桜にさきがけてまもなく梅まつりがはじまります。匂い立つ梅の香は、桜と並び立つ日本の春です。

自宅の庭にある臘梅は、漂う香りで開花に気づいていましたが、数年前から顔をよせても匂いがなく、人も老いたが花も老いたのか、淋しい現実です。

この時期に、忘れ得ない思い出がひとつ。三十数年前のこと、娘と共に買い物

と食事を楽しんだ帰りの車中、夕闇にほのかに浮かぶ白梅に目を留めたとき、寡黙な運転手さんが、だまって窓を開けて下さいました。さりげない心遣いに、その夜の梅は、何にもまして静かな、贅沢な春の香りになりました。

杉野 完次  
三鷹市中原 2-4-34

### 就職試験・昔の裏話

これは実話で現役時代のお話です…  
当時、就職の時期になると四高の同窓生からよく電話を頂いたものである。卒業して数十年音信不通なのに、電話の内容たるや四高時代の会話そのままである。「完ちゃん元気？いい会社で偉くなったようだね。実は子供が就職であんたの会社を受けたいと言うてるんやが、受けさせてくれませんか？」まあ、こんな具合である。

一応、人事局をお願いして書類選考はパスさせて、一次試験までは通過…。

ここまでならよくある話ですが…。皆さんご存知、腕白仲間の「0君」から電話が来た、娘の就職のお願いでした…。

幸か？不幸か？小生が働く「関西支社」の女性社員が2名壽退社、2名採用する事になっていたのである。

勿論、0君夫妻と娘さんが会社に尋ねて来ました。小生の推薦で試験を受けさせる事にしましたが、何せ人気企業、現在でも学生就職人気40位ぐらいの会社です。人事から募集規約が来たので目を通すと受験資格無し、無しの理由は？

色々ありましたが、親しかった人事局長に強引をお願いして受験資格を取り、書類選考で100名まで絞り、筆記試験、

これで20名に絞り20名を面接、さらに5名に絞り、東京本社で社長面接、2名採用である。

以上が手順ですが、筆記試験の彼女の成績は1番プラスゼロ二つ、つまり最下位である。まあ何とか20人まで強引に入れて貰ってやれやれ・・・である。

そして関西支社での最終試験合格5名プラス1名にして6名を社長面接までこぎつける。東京に行く前に「0君」の娘さんに「まあ何とか本社最終面接まで残したが後は頑張ってください」。必ず社長・役員から質問があると思うから、このように答えなさい・・・

質問「君の親父と杉野君の関係は？」

答え「私の父は腕白小僧でした、杉野さんと同じ腕白小僧の仲間です。そして生まれたのが私です。どうぞ宜しくお願いいたします」そう言って最敬礼をなささい・・・。

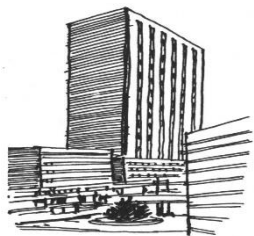
試験が終わって、社長から電話がきて「杉野君・君の腕白仲間の娘入れておいたから責任を持って教育してください」

その後、支社全体会議を開催、部長・副部長以下に結果の報告と個別に頭をさげて色々をお願いをした次第であります。

数年後、娘さんは壽退社・・・、「0」君ともその後便りはなし・・・。

鶉の森で元気にお暮らしか？お雛さんの様に可愛かった娘さんは元気ですか？「美人は得をする・・・」

懐かしい昔話です。



中村 督

四日市市三重 3-50

### ぶらり旅

退職してから出来るかぎり土日は避けて一泊二日のスケジュールで家内と二人旅行を楽しんでいる。体力的なこともあり、主として東海道新幹線やバス等を利用し、途中下車が出来ない飛行機、船は避けている。従って行先も限られて同じ所へ繰り返し行くことになる。東は圧倒的に東京が多い。東京でも新宿、渋谷、池袋は避けて、私の好きな作家池波正太郎の作品によく登場する浅草、本所深川、根津等の下町の風情あふれる町並みを徒歩でぶらりぶらりと歩くとかなり印象的にその町を覚えられる。先日もテレビに富岡八幡宮が出てきた。以前二人で出かけたときは地下鉄を使い、帰りは徒歩で永代橋を経て、人形町あたりをぶらついで日本橋迄きたことがあったので、このルートは初めての家内に印象が深くて深川不動さんや富岡八幡宮が意外な程の身近な存在として記憶に残っていた。次は日暮里を中心とした谷中、根津、千駄木方面も探索したい。西では京都によく出かける。日帰りが出来るのと本山知恩院へのお墓参りが出来るからである。京都では東京のように特に目的はないが里帰りをしたような気分になれて何度でも又いきたいなあと思うのは歴史と伝統が生み出す不思議な力によるものであるかも知れない。とに角元気に楽しい旅を続けたい。



生川 紀子（伊藤）

四日市市西新地 10-11

### 私とBOLA

BOLAはコーギー8歳雄犬です。BOLAというのはスペインで、愛くるしい3、4歳の男の子の愛称として使われ、本当の意味はボールです。3ヶ月で家に来たBOLAは大きな黒い瞳をくるくると輝かせコロコロとボールみたいに可愛かったのでBOLAと名付けたのですが、一年間に14キロの成犬となりがっかりしました。

ボラの助けを借りて近くの諏訪公園にお散歩に行きます。港の早慶戦といわれた四高と四商の野球の応援歌（お諏訪さんの神主に……、今日の試合は四高が勝つ!! 勝つ!!）と歌われたあの公園です。

昔みたいに動物園も図書館もありませんが地下に作られた大きな貯水槽のおかげで水害に悩まされる事もなくなりました。駐車場の上に作られた芝生の公園には赤い寒椿の花が冬の柔らかな日差しをあびて満開です。役目を終えて茶色く枯れてしまったお花に有難う「来年も美しい姿を見せてね」と一つずつ摘み取り私自身もわずかな日光浴に浸ります。

春になると鶴の森公園にでかけます。桜の花で満開です。丹羽文雄の、菜の花や……の句碑もあります。名もない草花の中に黄色い菜の花を見出すと何故かほっとして若い日を思い出します。

生まれた富洲原の家の裏は、さえぎるものもない田園で、黄色い菜の花がそよ風とひそひそ話をしたり、微笑んだりしている傍らで緩やかな時間を過ごし、所々にあるれんげ畑で弟と白れんげを探したり、首飾りを作り、転げ回った事が

昨日のこのように思い浮かびます。遠くに去っていった友、今病床で病んでいる友を思い、自分が今BOLAとともに健康でいられる幸せを感謝する毎日です。

西脇 基夫

藤沢市湘南台 6-55-1

### 江の島

昭和31年、横浜の会社に就職しました。最初の休日、見物に出かけたのが東京の銀座である。近場であることもあり気楽な普段着に、すりきれた下駄を履いて出かけた。さすがに当時でも銀座を下駄履きで歩いている人は見かけなかった。以後、東京へは下駄を履いて出かけるのだけは止めた。銀座並木を歩きながら田舎育ちの私は東京の美人に目をみはる。雑誌のグラビアで見かけるような女性ばかりである。最近の女性はファッションで身を包みきれいになったが、当時はまだまだそのような余裕もない時代であった。

次の休日、江の島に出かけた。海岸に立ってびっくり、真っ黒な砂浜である。富田浜の真っ白な砂浜しか知らない私には信じられない汚らしい海岸である。関東ローム層というこの辺一帯は、富士火山の影響で田畑も住宅地もすべて黒っぽい土で覆われている。それが洗い流されて出来る海辺は黒い砂浜の海岸となる。東洋のマイアミビーチと言って喜んでいる関東の人々を気の毒に思う。

住めば都、この地に住んで50余年になります。いつのまにか、黒っぽい湘南海岸も気にならなくなりました。江の島はあちこちに史跡を残す観光の島です。鎌倉時代の武将が信仰した弁天神社と、

その弁天さまの賽銭をくすねて育ち、島を追われ、後ほど囚われの身となる、「知らざあ言って聞かせやしよう、弁天小僧菊の助」の生まれた島です。ご丁寧に、七代目菊五郎と五代目菊の助の手形まであります。お閑なとき、遊びに来ませんか。ご案内いたします。

## 服部 幸市

四日市市諏訪町 12-5

### 我が家の歴史（ 3 ）

……伝承ということ……

最初にお話しましたように、終戦前後の混乱期に、宝屋の建物は、先ず軍部の戦略上の要請により、次には終戦直前の米軍機の空襲により、全くの壊滅状態に曝されました。

しかし此の時期に祖母は、先祖代々の宝物を失っては先祖に申し訳ないと、約半年の間蔵に籠って収蔵の美術品の半分を文庫のかたちにとまとめ、知人の紹介で三ヶ所に分けて疎開させ、危うく焼失を免れさせたのでした。

そして、無一物同然の生活に追い込まれてからも、先祖伝来の美術品は後生大事に手放さず、わずかに土地だけを売却して戦中戦後の飢餓を凌いだのも、この祖母を始めとする両親たちの、美術商としての心意気だったのです。

二代目当主の師匠でもあり、大村益次郎以下維新の先覚者多数を育てた、江戸末期随一の国学者廣瀬淡窓の屏風は、宝屋にとって文字通りの家宝ですが、これも祖母や両親の寝食を忘れた働きによって、他の貴重品ともどもかの困難な時代を生き延び、今も無事に健在しております。

私共夫婦は今年金婚式を迎えましたが、結婚して以来、弱い人間が助け合って生きる最小単位である家族を柱に、宝屋の発展のために力一杯働いてこられたのも、こうした代々の先祖の遺徳の賜物であることを思い、彼等から受け継いだ美術商としての精神を大切にして、家族の努力の結晶である宝屋を、今後とも護り育てていきたいと願っております。

## 濱口 博彦

京都府木津川市相楽台 9-1-5-108

### 転居顛末記

昨年末、40余年生活していた横浜市内の居宅を処分して、家内と共にここ京都府木津川市に新設された終身利用権方式の有料老人ホームに入居しました。ご参考までに一部始終を披露します。

施設に入ろうかなと考え始めたのは、70歳直前の頃からです。丁度その頃；

(1) 一人娘が英国籍を取得して、将来とも日本に帰って住む見込みはなくなりました。

(2) 1967年に取得した我が家も傷みがひどく、庭木や芝を含めて維持・管理が難しくなってきました。

(3) 前年に父が3年間の寝たきり療養の末94歳で他界しました。同時に、看病に疲れ果てた母が四日市市内の病院の介護病棟に入院しました。

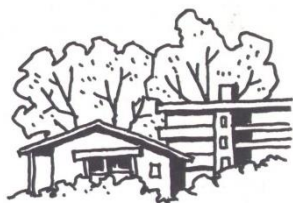
このような両親の終末期を経験して、僕らはとても戸建の家で生涯を全うすることはできないと思うようになりました。そこで、主に関東地域の老人ホームの資料を収集、研究・検討を始めました。

そうこうしている最中に、木津川市で家内の兄と同居している母親から、市内

で老人ホームの建設が始まったとの情報が届きました。早速、現地を訪ねて資料を入手しました。この施設、これまでに検討したどの施設よりも買い物や交通機関へのアクセスの点で有利でした。家内の親戚も居ることだし、ここを候補第一位にしました。一方、僕自身は、学生時代から関東地域で営々と積み上げてきた友人関係やこの地域社会との絆を放棄せざるを得ないことに抵抗を感じましたが、日本人女性の平均寿命は男性よりも7年長く、家内は4歳年下なので、理屈の上では僕の没後も約11年間は一人で暮らすこととなります。結局、僕も納得して昨年の5月この地を生涯の場を選定しました。

家具・家財の整理を始めました。まず、娘が欲しいと云った家具類を英国で住む新居に送りました。そして、施設に持参できるもの（したいものではなく）を厳選し、残りは欲しいと云われた方に差し上げましたが、多くは粗大ごみ処理（有料）や買取り業者に持ち込んで処分しました。業者の買取りはあきれほど安い値段でした。

次に、我が家の売却と施設への入居手続きも開始しました。幸い両方とも順調に進行して11月下旬にめでたく入居の運びとなりました。手間暇がかかりましたが、なんとか格好がついた今は、引越して、とても良かったなとつくづく思っています。



浜本 ひさみ（羽場）

小金井市貫井南町 1-11-7

### 八甲田山 - 山歩きと雪景色 -

平成21年夏八甲田山を歩いた。なだらかな道は隈笹や這松が茂り、晴れば遠くの山並みが折り重なって見える。紫や黄の野の花が至る所に群れ咲いている。

ヤッホーに木霊返らず俄にも視界は開け湿原に出づ

湿原にはわたすげの花が咲き乱れ、ベンチに寝転べば来世とはかくのごとき所かとも想像する。

山を降りるにつれて、目的地酸ヶ湯温泉の建物が見え隠れ、安堵の思いに足取りも軽くなる。白濁の湯は足腰をほぐし、疲れが消える。

温泉の打たせの滝に先づ肩を打たれて順に脚まで打たる

又、今年1月雪国の映像が連日流れ、この雪を見ようと、再び酸ヶ湯を訪れた。晴れていたが、3～4mの積雪の中に宿はあった。夏とは風景も一変し、太い氷柱に目を見張る。

窓に積む雪凍りつき薄暗し時折響く雪落つる音

翌朝吹雪の中、長靴を借りて外界へ出る。忽ち眼鏡に雪が凍りつき、10mも歩けば視界は真っ白、轍の跡も降る雪に掻き消されて引き返す。その雪はと言えばサラサラして、払えばさっと落ちる。その後大鱈温泉へ。大日如来を祀る大円寺にお参りし、街を散策する。平川が流れ、遠くの山並みが青空に映えて美しい。

雪積もり白一色の街ゆけば朱塗りの塔に日差し眩しき

夏と冬の景色を楽しみ、温泉を味わう旅となった。（短歌は旧仮名遣いです）

原 由美子（鈴木）

桑名市大字桑名 663-66

### 日常からの脱出

春、庭の木々がみどりを増すころになるとインタープリターの同窓会と称して山菜ツアーの誘いがかかる。すると体と足が山のほうへ向く。山菜を取りいい空気を吸い緑の中に身をおくだけで身も心も洗われたようになる。また山で食べる山の恵みは何ものにもかえがたい。秋は“きのこ狩り”。色づいた木々の下を落葉を踏みしめて歩く時、カサカサと足もとの音、落葉のにおい、せせらぎの音。そう、これこそ---日常からの脱出---である。

昨秋、岩手と秋田の県境にある八幡平をトレッキングする機会に恵まれた。その折同室になった方が「日常から脱出する為に山に来るの」と言われた。山の広大な景色と木々の間にあるおいしい空気。私もこうしてリフレッシュして残り少ない人生を楽しみ、頑張って生きなくては---

こういう機会を与えてくださるまわりの方に感謝！

榊村 正典

四日市市諏訪町 13-8-1405

### スキューバ・ダイビングと老人

ダイビングとの出会いは、20数年前にフィジーに旅行したとき、隣の新婚さんと一緒にプールで練習したのが始まりでした。その日の午後、インストラクターに同行して初めて外洋に潜った。この時の美しい珊瑚礁や色とりどりの魚の群、夢のような海中の景色は今も忘れられない。

以来、すっかりダイビングの虜となり機会ある度に体験ダイビングを行った。しかし、体験だけではものたりなくなり、3年後にパラオでライセンスを取得しました。以来、国内（熊野、串本、伊豆、越前、沖縄）や、国外（パラオ、モルジブ、ボルネオ、ニューカルドニア）と、70才で大病するまで250回ほど潜りました。

海に潜るには、少しの勇気と基礎知識が必要です。また一人で移動するのは危険で、二人でパデイを組み、何かあった時は助け合います。私も二三度危険な思いをしました。例えば海中でエアが切れたり、一人で海面に浮いてしまったりです。こんな時は慌てずに冷静に判断してパデイに助けを求めます。ダイビングはインストラクターがグループを組み現地の案内人をつけて海に入ります。陸に上がった時は、若い人達と海中での出来ごとを話し合ったり、お酒を飲んだりして楽しい時を過ごします。50本程潜ったころには、中性浮力（海中で一定の深さに浮いている状態）が取れる様になると行動範囲も広がり、海中写真やビデオを撮ったりしてより楽しくなります。

最近、地球温暖化の影響を受けて、珊瑚が白化して死滅し、魚類も減ってきています。このことに一人ひとりが気付いて、生活環境を守ることが大切ではないでしょうか。

今でもダイビングを続けたいのですが、今の体力では無理です。身をもって健康の大切さを感じております。皆さんも、自分の健康には十分に気をつけて、残された人生を、大切に一日一日を楽しく生きましよう。

水谷 ひで (田中)

四日市市中川原 1-10-21

### 私の卒業生

私は定年までの38年間高校の教師を勤めました。当然のことながらたくさんの卒業生を送り出しました。彼らはあちこちで活躍し私の相談にのってくれたり集いに招いてくれたり、更に思わぬところで声をかけてくれたりもします。

さて、その卒業生の中に元同級生がいるのです！ 四日市高女で同じクラスだった M さんが中学を卒業するとすぐ就職され、少し間をおいて働きながら高校の定時制に入学されていて、私が高校に新卒教員として赴任したのです。彼女が3年生に在籍していらっしやることは聞いてはいたのですが、なんと私がそのクラスの授業を担当することになったのです！ 恥ずかしさや戸惑いもありました。でも賢明な彼女は立場を自覚され一生徒として接してくださいました。そのお心遣いに今も感謝しています。

その後、彼女とはいろいろの場でお付き合いさせていただいています。数年前に大病をされましたが克服され地域のいろんな活動に率先して参加され中心となって活躍してみえます。どこにあのエネルギーが蓄積されているのかといつも敬服しています。彼女は今ではたいていは私を「ひでさん」と呼びますが、時にはおどけて「先生」なんて呼ぶこともあります。「同級生だった教え子がいる人なんてあまりいないわね」とその奇遇さを二人でいつも話し、お仲間にも紹介しています。ちょっと珍しい縁です。

水野 とよ子 (山田)

四日市市羽津山町九一五

### 四国遍路

九十九歳で旅立つた母の供養に、夫とバスツアーでの四国遍路を続けている。二月中旬、四国遍路で一番の難所と言われる第四十五番大宝寺と第四十六番岩屋寺の長い参道は雪に覆われていた。普段でも杖が手放せない私は一番最後に本堂に辿り着き、ツアー同行者達に温かく迎えられて一緒に作法道理に参詣を済ませた。滑りやすい帰りの坂道に恐怖心を募らせていると、男性と女性が両脇を抱えて「一人で転ぶと恥ずかしいけれど三人なら笑える」ど冗談を言いながらリードして下さり転倒する事も無く二寺の参拝を済ませる事が出来た。どちらからいらしたのですか？「日本」お名前を？「日本人」感謝の心で訊ねた私は男性の返事に思わず笑ってしまった。「どんな時もお節介な人が居るものよ。仕事柄ほっとけなくて、気にしなくて良いのよ」女性の思いやりの一言でヘルパーさんと分かった。母がお世話になったヘルパーさん達を思い出し、遍路の旅で優しい人に出会い助けられた事を、弘法様のお引き合わせだと感じた。夫と共に誓った満願が見えてきた満たされた思いで帰路に着いた。近頃外出先で親切にされる事が多々ある。親切を素直に受け入れて、有難うを忘れない愛されるお婆さんとして生きて終わりたい。





山中 房子（豊田）  
四日市市八王寺町 8

### 喜寿の「好奇心」と「恥じらい」

近頃頼に忘れっぽくなり、もしや認知症？との思いが心を過っていた矢先、「市民大学」へのお誘いを受け、恥ずかしながら清水の舞台から飛び降りる覚悟で入学してみました。

案の定この歳では、午前中の有識者による幅広い分野の講義はともかく、午後のクラブ活動（書道・絵画・英会話・コーラス・俳句・俳画・銅板工芸・陶芸）では、好きな事で愉しみを満喫するつもりでしたが、その間隙を縫っての社会見学・ボランティア活動・研修旅行・文化祭（作品展示・舞台発表）等の行事では、10~15歳以上も若い人達と一緒に歌いながら踊ったり、唄いながら手話を覚えるのはとても難しいことでした。戸惑っている私に、若い男の方が何度も何度も手取り足（？）取り親切に教えて下さって、その優しさに感動させられ、久し振りに胸のときめきを覚え、チョッピリ若返った（？）心地になりました。

卒業文集のタイトルは、私が応募した「好奇心」が採用されて光栄の至り。熟年コース・専攻課程の二カ年修了後も多種多様のお楽しみ行事があり、自由参加の気楽さが気に入っています。

さて今後傘寿を迎えたら、陶芸とマジック（無理々々と声が聞こえています）をやってみたくて願うや切。生きている限り「好奇心」と「恥じらい」を忘れず、楽しい日々を重ねつつ「ときめいて」いたいと希って止みません。

渡邊 千恵子（服部）  
愛知県春日井市藤山台 5-4-8

### 東北関東大震災

3月11日午後2時46分、私は1時間ほど前に30年ぶりに訪れた3人の客との積もる話に夢中だった。「あっ地震！」の声に、私も同時に掃出し窓のガラス戸を開け身構えた。早速つけたテレビでは三陸沖が震源と報じる。こんな遠方まで揺れるとはかなり大きな地震じゃないかしらと4人で話し合っているうちにどンドン報道は進む。日本地図の沿岸部が大津波、津波警報発令でいるどられていく。三重の津方面へ帰えられる客は近鉄が止まっては大変と予定より早めに辞された。

客を送り出した後、私はテレビの前にくぎ付けになって動けなくなってしまった。津波の猛威はあの美しく豊かな海岸線を、人と家を、車も船も次々と飲み込んでいく。更に、福島原発緊急事態宣言が発令された。

亡夫が福島出身で、高齢の兄姉たちが県内に住んでいるので気がかりだった。しかしどことも電話は通じない。各局の映像のなかに手がかりでもないかとチャンネルを変えてみたりもした。浜通りではないので、津波の被害はないだろうと、それだけを気休めに、どうぞ無事でと、祈るしかなかった。

3日目に東京近郊の甥と連絡が取れた。「年寄りもみんな大丈夫です」と。仙台の友人とは4日後の夜、やっと電話で話せた。皆さん地震の恐怖や被害があるのに津波にあった人たちのこと思えば・・・と辛抱強い。福島原発の危機がいつ回避できるか心配は尽きない。

## 演劇に見る東洋と西洋の共通性

伊藤幸子

能、狂言、歌舞伎等、日本の伝統芸能のテーマには、西欧の伝説の中に、同類を見出せるものが少なくない。例えば歌舞伎の近松半二作『妹背山婦女庭訓』の、互いの家が奇しくも敵同士であったが故に死なねばならなかった不幸な恋人達には、誰しものが直ちに、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を思い起こさずにはいられまい。また、この世とあの世とをまたいで永遠に消えることのない恋を描いた能の『定家』は、人間の宿命的な愛のありようを描いて、西欧の恋愛文学の原点とされている『トリスタンとイゾルデ』と全く同一の趣を示している。

愛欲をかき立てる秘薬を間違えて飲んでしまったトリスタンとイゾルデの物語には数多くのバージョンがあるのだが、基本的には、この二人の死後其の墓には蔦葛が生い茂り、両方から枝を延ばして絡み合い、二人の恋の情念が、今も決して消えてはいないことを示していると言う点で共通している。そして其の特色が、歌人藤原定家と、後白河法皇の皇女である式子内親王の、死もこれを隔てることの出来ない恋という『定家』のテーマにびたりと一致するのである。

諸国一見の僧が都の一隅で、折からの夕時雨を凌ごうと、藤原定家に縁ある“時雨の亭”にしばしの宿りを求める。そこに蔦葛が纏いついた石塔を見かけ、それが式子内親王の墓で、式子の死後、定家の執心が蔦葛となってそこに纏いついているのだと教えられる。二人の契りの深

さに心を動かされた僧が、草木国土・悉皆成仏の功德のあらたかな薬草喻品経を手向けていると、式子の霊が在りし日の姿で現われ、苦しい戒めから解き放たれたことを感謝しつつ報恩の舞を舞うのだが、何時の間にかまた元の塚の中へと消え失せてしまう。

運命が二人の結びつきを許さぬと知るや、そのまま死の合一に直行するロミオとジュリエット、いささかの未練も見せず我が身を捨て去る『妹背川』の久我之助と雛鳥の性急な若さに比べ、魂の解放よりも存在の奥底まで呪縛にがんじがらめにされることを選ぶトリスタンとイゾルデ、そしてここに見る定家と式子の恋は、明らかに大人の恋であり、執念深いまでに自虐的かつ粘着的な情念である。

ところで、上に揚げたような作品が、性急であれ永続的であれ、人間の生の本質的なはかなさ、あるいは業の深さをまざまざと見せつける深刻な悲劇だとすれば、反対に生の不条理性を思い切り笑いのめすという滑稽な作品も一方にはあるのである。この場合は、観客を泣かせるのではなくあくまでも笑い転げさせながら、その笑いの底から何とも言えぬ人間存在の不確かさ、不気味さをじわじわと浮かび上がらせて、背筋に冷たいものを走らせるのである。このタイプの一例として、シェイクスピアの初期の喜劇 *The Comedy of Errors* の翻案『まちがいの狂言』を紹介しておきたいのだが、紙幅の都合でそれはまたの機会に譲ろうと思う

## 都鳥 10 号で終刊といたします

西脇基夫

平成 19 年 5 月に都鳥の初版を出版して都鳥 10 号で 5 年になります。最初 30 名ほどの仲間を対象にそれぞれが思い思いに作文して投稿していた同好誌も、いつのまにか 140 名の方々に配布して読んでいただいています。卒業生のおおかた 3 割の方に読んでいただいている勘定になります。この予想外の広がりをつたいへん嬉しく思っておりますが、一方で大量の出版物を素人組織である高齢者の集まりで続けていくことがたいへん難しくなってきました。私たち編集者で話し合っ、丁度 10 号でひと区切りとなるのを機会に、残念ながら終刊とすることにいたします。熱心に投稿してくださった方々、資金的に援助してくださった方々、貴重なコメントを寄せてくださった方々に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

この冊子「都鳥」は、三重県立四日市  
高等学校、昭和27年（1952）卒  
業生で作るエッセイ集です。平成19  
年（卒業後55年）に同好者が集まり  
創刊しました。

印刷・出版責任者：西脇基夫